

〈新刊紹介〉

## 鄧小南著 『宋代文官制度六題』（三聯人文書系）

三聯書店（香港）有限公司 二〇二一・九刊

大三十二開 二一六頁 九八香港ドル

李靈均

本書は宋代官僚選任制度をテーマとして、著者の主要論文を集成した論文集である。著者である北京大学歴史学系鄧小南教授は長年にわたり中国宋代史、とりわけ宋代官僚制について研究してきた。本書は再改訂された六編の論文によって構成される。内容は以下の通りである。まえがきは「永遠の挑戦―歴史研究における資料と議題をめぐって―」、第一章は「北宋前期における任官制度の形成について」、第二章は「北宋時代における循資原則とその普遍作用について」、第三章は「宋代における資序体制の形成とその機能について」、第四章は「北宋文官磨勘制度の初探」、第五章は「宋代文官差遣除授制度の研究について」、第六章は「宋代地方官員の政績に対する考察機制の形成について」。

本書は綿密な論証を行い、鮮明な問題意識をもっており、そして宋代官僚選任制度における幾つかの重要課題を扱って

いる。その制度の中において、「官人への授受の別には、官・職・差遣が有る」（『文献通考』卷四七を参照）という点が最も注目されている。ちなみに、「官」とは官員の身分等級を指し、「差遣」とは実際の職任である。本書もこれを取り上げており、まずは唐代の歴史に遡り、北宋前期に成立した「官・職・差遣分離」という任官制度を分析し、続いて「官」に対する審査である「磨勘」制度の分析を厳密に行い、そして「差遣」の授任制度を研究する。それを基に、宋代官僚制上の重要な循資原則および資序体制をめぐって、著者は精密に熟考し、且つ最後に宋代地方官員の政績に対する監査機能の優劣を全面的に評価する。要するに、本書で扱う問題は、宋代史における核心的な課題となるであろう。

宋代官僚制の先行研究には、内藤湖南氏・宮崎市定氏らが提唱した「宋代君主独裁制」の論説があり、それを踏ま

えて議論された梅原郁氏の『宋代官僚制度研究』（同朋舎、一九八五年）がある。著者は『宋代文官選任制度諸層面』（河北教育出版社、一九九三年、中華書局、二〇二一年）という、文官中心の選任制度の考察についての著書を発表しており、一九九〇年代には、中嶋敏氏が編集する『宋史選舉志訳注』でも参照されたことが分かっている。あとがきによれば、本書に掲載されている論文は一九八六年より一九九七年に至るまで執筆されてきた。この度、新たに改訂された本書は『宋代文官選任制度諸層面』の姉妹篇として読むべき論文集だと言えよう。